Essay

「グッドライフ」

―私の読書案内―

市立貝塚病院 総長
小川 道雄

チョン・ダウム、9歳の男の子。急性リンパ性白血病でソウルのがんセンター血液腫瘍内科に入院している。小学3年生だが、学校へ通ったのは全部で6ヵ月にもならない。発病を告げられたとき、治療しないと、短ければ3ヵ月、長くて6ヵ月と言われ、薬物療法をはじめた。完全寛解と再発を繰り返して2年経つ。入院はすでに10回。ダウムは抗癌剤の副作用に苦しみ、薬さえ飲まなければ、と泣いて訴える。

ダウムの父チョン・ホヨン。詩を書き、文学誌の新人賞を受賞したこともある。海兵隊を満期除隊して大学で学ぶ。大学の同人誌に詩を発表し、その挿絵を希望したダウムの母と出会う。やがて結婚、当時ホヨンは女性誌の編集者だった。豊かな家庭に育った妻は、すぐにダウムが生まれて疲れはて、また薄給を嘆いた。そのためホヨンは翻訳の副業をはじめ、締め切り時間に追われる雑誌社から時間に余裕のある書籍出版社に移る。給与は下がったが生活は安定した。

ダウムが3歳のとき、妻は絵の道を選び、大学院に入る。やがて師に惹かれ、ホヨンとダウムを残して、彼とフランスへ旅立った。その後ホヨンとダウムは2人で暮らす。

ダウムが7歳のとき発病。ホヨンはダウムに付き添いながら、あらゆる種類の翻訳をした。しかしIMF経済危機で出版不況が続く。貯えをくずし、マンションを売って高額な医療費にあてきた。医療費の支払いが遅れ、ついに事務局のソン係長に、支払いができないのならすべての医療行為を中止せざるを得ない、と通告される。

ダウムが入院した頃、フランスにいる妻にダウムの病状を書き送った。妻の代理の弁護士が来て、離婚の書類を渡された。子供の養育権放棄の書類には、妻の署名があった。

今回の入院でミン科長から、これまでの薬物療法と放射線治療はもはや限界、残された唯一のチャンスは造血幹細胞移植（骨髄移植）と告げられた。ダウムは一人っ子だから、非血縁者間同種骨髄移植である。移植前には大量の薬物投与と全身放射線治療がある。費用を尋ねると、3,000万ー4,000万ウォン（現在100ウォンが約10円なので、ウォンの10分の1が円、ここでは邦価300万～400万円と考えると理解しやすい）との返事。

だがダウムとヒト組織適合性白血球抗原（human histocompatibility leukocyte antigen:HLA）の一致する人は、韓国の骨髄バンクにはいなかった。

骨髄移植を含む造血幹細胞移植は、強力な化学療法と全身放射線治療で白血病を寛解状態にした後に施行される。そのときHLAの一致したドナーが必要である。HLAの一致は移植片対宿主病（graft versus host disease:GVHD）を抑えるのが目的で、HLAの不一致数が増えるほど、GVHDが増え重篤化する。HLAの一致は、兄弟姉妹で4分の1、骨髄バンクではドナー登録数や人種により異なるが数千～数万分の1以下の確率である。親子では一致しない。

造血幹細胞移植では、移植前に行う治療以外にドナー側の免疫細胞（T細胞、NK細胞）が残存する白血病細胞を攻撃する移植片対白血病（graft versus leukemia:GVL）効果も、重要な役割をはたす。

最近注目されているのが、ハプロ移植（HLA半

合致血縁者間移植）である。HLA の半数一致であるから、父母や、兄弟の 4 分の 3 はもちろんドナーとなりうる。祖父母など近縁者にも可能性がある。当然 GVL 効果が高くなる、つまり効果は上るが、同時に GVHD の頻度を増し、生着に問題がおこる。これに対して、T 細胞除去やアルキル化剤シクロホスファミドの大量投与が行われてきたが、これによって GVL による治療効果が減弱し、再発例が多くなった。最近ヒト胸腺免疫グロブリンを中心として、免疫抑制剤の組み合わせによる前処置の効果が、報告されている。これは一人っ子政策で兄弟姉妹のいない中国や、日本の特定の専門施設で試みられている。前処置の標準化が課題である。

ハプロ移植に関する最近の総説[1)]では、ハプロ移植の利点の一番目に、造血幹細胞移植によって治癒しうる小児患者は、ドナーとなりうる肉親に連れられて入院する、したがってドナーを探すために長い時間を要せず、すぐに移植を行いうることがあげられている。少子化の進行する日本でも、専門施設を中心にさらに広まるのではないだろうか。

ミン科長は骨髄移植が不可能なので、抗癌剤治療の強度を高めて寛解を試みることをすすめる。しかし寛解したとしても再発する。ダウムは苦しむが、ただ時間は稼げる。これが最後、とダウムに退院を約束して、治療を受ける。それが終って、ミン科長が止めたが退院する。ダウムが心から喜べる日を、一日でも作ってやりたいから。家具を処分し、中古のワゴンを購入。そこに入るだけの荷物を積み、2 人は旅に出る。海へ、山へ。

サラク谷に流れついたのは、旅の途中でピ老人に会ったからだ。車の入るところから、さらに山道を 30 分かけて登ると、ピ老人が一人住む山あいのなだらかな丘陵地に着く。塵肺で死を覚悟した彼は、ここで健康を取り戻したのだ。新鮮な空気、湧き水、感染の原因もない。ホヨンは老人と一緒に薬草を採ったり、蛇を捕まえスープにしたりして、ダウムに飲ませる。やがて驚くべきことにダウムは健康を取り戻し、リンパ腺の腫大も消える。

しかし退院して 36 日目、ダウムは頭痛を訴える。高熱、リンパ腺の腫大が出現。地元の病院に運び込む。再発が原因だから、治療は元の専門家に、とすすめられる。費用をどうしたらよいか。そのとき山を下り、電波が届くようになった携帯に、雑誌時代の後輩女性記者ヨ・ジニから連絡が入る。ダウムの母がパリから会いに来て、行方のわからないホヨンの連絡先を尋ねてきた。ダウムの母はたびたびソウルのミン科長に息子の様子を聞いてきており、ミン科長が日本の骨髄バンクで、HLA の完璧に一致した登録者をみつけたことを知った。それを伝えるためにホヨンの連絡先を尋ねてきたのだ。

ホヨンはすぐにダウムをソウルに移す。登録者は 20 歳のミドリという日本人女性。科長の日本人の友人たちがミドリを説得して同意にこぎつけた。しかし移植費用を考えると絶望的になる。移植手術の預託金として 2,000 万ウォンを前納、移植前後の費用が別に 2,000 万ウォン、ほかにドナーの航空運賃と滞在費が必要である。友人に会い、出版社を訪ね回ったが、工面できない。

ダウムの母親は、ダウムと離れて暮らして心の休まるときがなく、ミン科長に様子を尋ねていた。そして治療を中止したこと、ドナーが見つかったことを知り、ソウルに戻り、ホヨンの行方を捜した。彼女から治療費を支払うと言われ、ホヨンは誘惑にかられる。しかしどんなに犠牲を払っても、息子を自分の力で守り抜かなければならない、と思う。

移植のために費用をどうしても前納できない。預託金の延期を事務局でソン係長に哀願しているとき、偶然ソン係長が同じ海兵隊出身の後輩であることを知る。そして何とか前納の延期の処理をしてもらう。しかし翌日から移植センターで治療がはじまるという日になっても、ソン係長との約束を守れない。

そのときソン係長が、先輩との縁がなければこんな話は絶対にしませんが、と断って秘密をもらす。従兄の娘が脳腫瘍になり、治療の費用に困った従兄が腎臓を売りたい、と言ってきた。裏で行われている臓器売買があり、病院で働く友人と連絡をとった。ホヨンは聞き流すことができない。従兄は 3,000 万ウォン受けとったと知り、紹介を頼む。

江南にできた総合病院の事務職員を尋ねる。ソン係長から頼まれたので手伝うが、臓器の売買は不法なので気乗りしない、腎臓は一般的に 3,000 万ウォン、と言う。ただしまず検査が要る。できるだけ早く、と頼み込み検査を受ける。検査はかなり複雑だ

った。血液、尿にはじまり、超音波、さらにCT、ついに組織検査まで。そしてその病院の腫瘍内科で、腎機能が悪い、その原因は肝臓の腫瘍、多発性の原発性肝癌、と告げられた。

友人のフィルムとして、ダウムの主治医ミン科長に見せる。末期の肝臓癌、抗癌剤治療を受けても生きるのは難しい、6ヵ月はもたないだろう、と言う。そういえば右脇腹の痛み、体重の減少、脱力感もあった。

とりあえず後輩記者ヨ・ジニが預託金を払ってくれる。それから骨髄移植まで、片時もダウムのそばを、離れなかった。孤独で、無念に思いながら考える、自分に残されているのは何か。

ソン係長に会う。彼はもう腎臓のことも肝臓のことも知っていた。ホヨンは言う、プライドではない、息子の治療費だけは自分の手で工面したい、もう一度連絡をしてほしい、癌で死亡した人は、ほかの臓器と違って角膜は提供できるらしい、角膜を売りたい、と。自分に残された時間は長くても6ヵ月だ、6ヵ月を片目で生きようと両目で生きようと何の違いがあるのか、この期に及んで、息子に何をしてやれるのか。ダウムはやっと9歳、じきに父親なしで世の中を生きていかなければならない。息子のために父親として何かしなければ、死んでも死にきれない。もう一度動いてほしい、と係長に頼む。

骨髄移植を終わり、無菌室に隔離されたダウムのところへ、2日間姿を見せなかったホヨンが、ガウンとマスク、そして片目に包帯をして顔を出す。目が疲れていて、休ませるために包帯で覆っている、とホヨン。骨髄を提供する日本人女性の決意、崇高な犠牲、それに反して自分は角膜を売った。あれは厳然たる取引、密売だった。不道徳と妥協し、良心を売り払った。純粋な気持ちで臓器を提供する人々を辱しめた。しかし自分にはそれしか方法はなかった。

ダウムが一般病棟へ移ったとき、パリに電話し、こんな僕のそばにいたって、ダウムの将来は知れている、君があの子の将来を引き受けてほしい、と言う。パリからダウムの母親が来る。

ホヨンはダウムに、これからはママとフランスで暮らせ、と告げる。パパといればいい、と言う息子を、やれと言ったらやるんだ、と大声で怒る。とうとうダウムはパパと暮らさせてほしい、と哀願しなくなった。涙のあふれる目で、ホヨンを見つめるだけだった。

ホヨンの体はボロボロになった。体重65kgが40kgに減った。腹水が貯り、呼吸もままならない、黄疸も出た。ミン科長がモルヒネを注射しようと言ったが、断る。2年以上息子が耐えた苦痛を、全身で実感した。息子への罪滅ぼしのつもりだった。

退院してフランスへ向かう予定の前日、ダウムの母親から電話。今晩7時に病院を出て息子を連れてパリへ戻る、困ったことにあの子が泣きめいて、ホヨンに会えるまでは行かない、と言っている、病院にすぐ来てほしい、と。7時なら病んだ体は暗闇にまぎれる。息子の目に焼きつけられる自分の最後の姿が、病んだ不様な格好であってはならない。生涯心に宿し、悲しませるわけにはいかない。

7時に小児病棟の裏のベンチで待っている、ダウムだけ寄こしてほしい、と返事。電話のあと、ミン科長にモルヒネを打ってもらい、外灯を背にしてベンチに座る。両手を膝におき、腰をまっすぐに伸ばした姿勢で。

「パパ」と叫んでダウムが駆け寄ってくる。ホヨンは前もって決めておいた距離で立ち止まらせる。明かりのせいでよく見えないから隣に座りたい、というダウムを許さない。ダウムの性格、行動、癖などを書いたノートをママに、パパの詩集はお前が持っていろ、とベンチにおいたバックを指す。そしてもう行け、早く、ポケットから手を出して、顔をあげ、胸を張れ、凛とした姿で生きろ、パパはお前を忘れる、お前もパパを忘れるんだ、早く、行け、と告げる。

ダウムは声をあげて泣く。泣きながら少しずつホヨンから遠ざかっていく。

ここまでは、ダウムとホヨンがそれぞれの気持ちを交互に述べた文章で描かれている。このあとホヨンのその後の様子を、後輩記者ヨ・ジニが記す。

（チョ・チャンイン（金光英実訳）：グッドライフ．小学館文庫，2011．）

［文献］
1）Oevermann,L.& Handgretinger,R: New strategies for haploidentical transplantation. Pediatric Res.,71: 418-426,2012

Essay